

感覚統合的アプローチと医療3者連携によるLD（書字障害）の克服

～幼小の連携～

中感覚統合的アプローチ 医療3者連携 LD（書字障害）

感覚統合的アプローチとLD研究部会

〒504-8555
岐阜県各務原市那加桜町1-69

1 研究の背景

特別支援教育が始まり発達障害に対して理解が進むと共に、電子黒板・実物投影機が順次小中学校に入っている。だが、指導の重点が集団行動の困難性が強く目に付きやすいASD・ADHDに置かれたり、ICT機器の活用は、定型発達児童生徒に使われたりしている。集団行動を乱すわけではないLDへの支援はというと後回しになっており、児童生徒の教育的ニーズを的確に捉えることができていない。LDかどうか、指導はどうしたらよいか、ICT機器の使用は有効か、自信がもてないまま担任が指導をしている。

医療現場に目を向けるとLDはみなし診断の域を出ていない。客観的な心理検査や児童生徒の学校での学習の姿を見ることや学校との連携はなく、診察室で保護者からの聞き取りをもとに診断されている。また、市教委が小中学校や幼稚園を巡回相談すると園・小中学校の指導者の多くが子どもの姿勢の崩れを訴えている。小学校低学年で姿勢が崩れている児童の多くに書字困難や不注意がみられ、一般的な指導では集中力や姿勢・字形が整わず、医療と連携し発達性強調運動障害の視点でみる必要性もでてきている。

上記実態であるためLDに対して今まで専門的で組織的な支援がなされてこなかった。そこで各務原市特別支援教育推進部会の先行実践をふまえ、先行的な研究として感覚統合的アプローチと医療連携に視点を当て、PCタブレット・TV電話等ICT機器を有効活用し、LDに特化した専門的・組織的研究推進を考えた。

2 研究の目的

LD（書字困難）児童への教育的ニーズを幼小が連携して的確につかみ、感覚統合的アプローチと医療連携による専門的支援を継続して、字形を整え集中力を高め、書字困難を改善すること。

3. 研究の仮説

LD（書字障害）傾向年長園児へ「身近な道具を使い楽しく運動する中で五感と固有覚と前庭覚を統合する感覚統合的アプローチの指導」のシリーズ講座の内容をDVDにまとめて幼稚園と小学校の指導につなぎ、医師と学校と家庭の3者連携体制の基で医師の確定診断を受けた児童に対し、感覚統合的アプローチとTV電話相談を含む3者連携指導を半年間行えば、字形が整い集中力が高まって書字困難が改善される。

4. 研究を始める前の現状

- ・集団行動を乱すわけではないLDへの支援は後回しになっており、児童生徒の教育的ニーズを的確に捉えることができていない。
- ・医療現場に目を向けるとLDはみなし診断の域を出ていない。
- ・小学校低学年で姿勢が崩れている児童の多くにLD（書字困難）がみられ、一般的な指導では集中力や姿勢・字形が整わない。

5. 研究実践の内容

【5の1】 感覚統合的アプローチのシリーズ講座5回をDVDに編集し必要幼稚園・小学校に配付する。

- ① 6月 感覚統合的アプローチ概論
- ② 7月 前庭覚と固有覚
- ③ 7月 子どもの防衛体力について
- ④ 8月 感覚統合的アプローチでのチェック事項
- ⑤ 9月 臨床観察の基本となるもの

の5回のシリーズ講座を行った。

それぞれ1時間程度の内容で、アンケートを取り受講者が参加しやすい18:00から行った。

それぞれの内容が下記である。



第3回講座の様子

感覚統合的アプローチ概論	エヤーズ博士の感覚統合理論をもとに、医療的なりハビリテーションではなく、楽しく遊ぶことを前提に取り組む内容を概説。
前庭覚と固有覚	前庭覚と固有覚はどのような働きをする感覚で、聴覚等の五感とどこが違うのか、脳のどの部分にあるのかを解説。
子どもの防衛体力について	体力には、防衛体力と行動的体力の二つがあり、うまくできないとき自分を守ろうとする防衛体力のメカニズムを解説。
覚統合的アプローチでのチェック事項	エヤーズ博士の考える感覚アプローチの6つの原則をそのまま引用し、6つそれぞれと4つの視点について解説。
臨床観察の基本となるもの	子どもを見立てるということはどういうことなのか、臨床観察をする上で重要視しなければいけない内用を解説。

ビデオカメラを1台固定撮影用に使い、もう1台を専業者撮影用のハンディカメラとして撮影し5回講座合計6時間の内容を90分に編集し1枚のDVDとした。編集業者と打ち合わせて作製したDVDを教授に監修してもらうことを繰り返して完成させた。作成の理由は、受講者の復習と配付希望の小学校・幼稚園の視聴者に分かり易く伝えるためである

配付希望を市教委からのメール配信や最終回受講後に募った。昨年の経験から意識をもって視聴してもらえる園や学校及び指導者に配布したほうが、子どもの姿に反映すると考えたからである。



配布したDVD

【5の2】 感覚統合的アプローチのシリーズ講座5回の実施のうち3回の終了後に幼小（1年生担任）指導者交流会と夏季幼保小連携実践講座を行う。

第3回・4回・5回講座後の計3回幼稚園教諭と小学校1年生担任の指導者交流会を行った。

1回目は、幼小交流会を設定した理由を伝えて園や学校での姿勢や集中力について子どもの様子を交流した。姿勢については、なかなか一般的な指導では直らないことや鉛筆の持ちかたが著しく悪いことが語られた。集中については、ボーっとして話を聞いていない子の話が語られた。

2回目は、気になる子どもの姿を交流した。自分の世界に入ってしまうなかなか切り替えられない姿や我慢することができずトラブルが絶えない姿等の発達障害の行動特徴を示す姿がまず語られた。次に、落ち着きがなく、常に頭が動き正しい姿勢で着席してられない姿が語られた。

3回目は、幼小の連携の内容を交流した。現状でも指導要録の引継ぎ等で連携をしているのだが、接続がなされているという実感がなくことや私立の幼稚園から個人情報や学校に伝えにくいこと等が語られた。そして、接続が実感できるような内容を見つけたいべきだということとまとまった。



交流会の様子

3回の交流会の話し合いを受けて、夏休みに夏季幼保小連携実践講座を行った。小学校低学年担任9人がそれぞれリーダーとなって9グループを作り、そこに幼保の指導者（園長含む）が3～4人ずつ分かれて交流会を行った。

年長の時気になった子の話題提供をもとにその子の小学校での姿が話された。小学校で適応していった子もいれば、逆に不適応が激しくなった子もいた。子どもの姿が良くも悪くも変容した理由を知るためグループの中で質疑応答が行われ情報収集が進んでいった。口頭でのやり取りが進んでいくうち書類では伝えきれなかった保護者の園・学校に対する態度、児童の生育歴、発達障害の可能性、虐待・ネグレクトの可能性等の情報が入り、顔を合わせた交流ならではの情報が伝えられ有意義な連携となった。

幼小の指導者が顔を合わせて情報交流する有効性が確認され、参加園長の中には、来年度も今回のような連携を実施してほしいという意見が出された。

【5の3】 KABC-II（LD特性をつかむ客観個別検査）を実施する。保護者の同意を得て検査結果と学校での様子をTV電話等で医師に伝え、診断を得る。

今まで、指導者の誰が見ても字形が乱れた文字は、児童が生まれつきもった書字困難なのか、ふざけや怠惰からなのかをはっきりさせることができなかつた。そこで平成25年度より発売された客観検査KABC-IIを使用して見立てていった。東京で行われたアドバンス研修会に参加しプロフィール分析の中級レベルを取得する中で、習得度尺度の書き尺度にまれな有意差1%水準というデータが出たときLD障害の可能性が大きくなることを学んだ。



有意差プロフィールの抜粋

次に必要になるのが診断であった。「4. 研究を始める前の現状」で書いた様に診断はみなし診断の域をでていない。理由として考えられることは、医師は学校で児童の書く姿や指導を受けている様子からわからないこととLDを判断する客観的データをもっていないことがあげられる。

各務原市の教育支援委員会での判断を見ても、児童の学校での書く姿や指導の様子はわかっても客観検査がなかったり、委員がプロフィール分析ができなかったりする中で判断がなされているのが現状である。児童の様相と客観資料の両方をもって明確に診断できていない。

医師に児童の様相と客観資料を渡せばLD診断が出される可能性が大きいのだが、患者の中にLD傾向の児童がいても学校がLD傾向を認識していない場合が多い。そこで医師が保護者の同意をとって学校長宛てに手紙を書き、教育委員会にKABC-IIの検査してもらうよう依頼をした。教育委員会の指導主事が検査を行った。結果を保護者と担任に伝える懇談会を児童在籍校の特別支援教育コーディネーターが設定し、その中で担任より提出されたテストやノートのコピーをKABC-IIとともにTV電話を使って医師に渡すことを考えた。しかし、診断を出す為には医師だけではなく臨床心理や教育現場の専門家も入れて診断を出していくことが望ましいということになった。各務原市特別支援教育連携協議会の終了後に医師・教授・市教委指導主事・学校現場代表でケース会議を行ってLDの診断が出せるか検討をした。



ケース会議の様子

その結果LDの疑いの診断がだされるようになっていった。

TV電話を使い、医師に児童の姿と客観データを送るのは便利でインテークとして有効なことは分かったが、責任をもって診断を出すためには、専門家が集まって顔を合わせ、ケース会議を行うことが重要だということが実践から示された。

【5の4】 LD診断の児童に、「感覚統合的アプローチ指導を入れたTV電話等による学校・保護者・医師の3者連携指導」を行う。

疑いを含めてLDの診断が出された児童にどのような手立てをうって指導を行い書き困難が明らかな字形を許容の範囲の字形にしていくかを検討した。姿勢や指使い、書き方の指導から入るのではなく感覚統合的アプローチの指導を行うのが有効と考えた。

感覚統合的アプローチとは 脳に入って来る様々な感覚情報を効果的に組み合わせることを楽しみながら学校と家庭が連携指導することである。支援に医師が加わることで効果が上がると考えた。診察に忙しい医師のためTV電話を使用して医療的なアドバイスももらい、学校・保護者・医療の連携指導を行い、3者連携指導の重要性を実証していった。

【学校が必要性を感じた場合】

担任が日々指導をする中で、どうも一般の指導では字形が整わず書き困難を児童がもっていると感じた場合、校内教育支援委員会で行動の特徴を判断し、中学校区教育支援委員会で更に判断し、市教育支援委員会で措置の判断をする。市教育支援委員会は、最終判断となるため保護者の審議同意と判断の根拠となる客観資料と観察資料がないと判断されない。資料として重要となるのが「医師のコメント・担任のエピソード記録・児童のノート・KABC-II」となる。児童在籍校の特別支援教育コーディネーターが担任と保護者が教育相談を重ねる中でKABC-II検査の保護者合意が得られたことを確認し、医師のコメントも得て教育委員会に検査を依頼し指導主事が実施した。医師のコメントを得るときTV電話が有効であった。



医師とのTV電話相談

【医師が必要性を感じた場合】

学校で書き困難を認識できず、診察時に保護者が医師に書き困難を相談したり、医師が問診で気が付いたりした場合は、医師が児童在籍学校長にKABC-II検査依頼の手紙を送った。学校長は、教育委員会に依頼をして指導主事が検査を実施した。検査の結果は児童在籍学校の担任・特別支援コーディネーター・保護者が同席の場所で指導主事よりフィードバックがなされる。KABC-II検査を行う前にTV電話で担任や主事が医師より診察の様子や依頼の理由を聞いたことが、その後の指導に活かされた。

【5の5】 「LD(書字困難)児童の教育的ニーズに合わせた在籍学級での指導と書字ソフトを使った学校と家庭での指導」を半年行う。

LD(書字困難)児童の文字とはどのようなものか、本会会員が各自の勤務校で著しく乱れた文字を見つけデジカメに写したものを共通サーバーに送信した。会員間で意見を出し合いPC上で



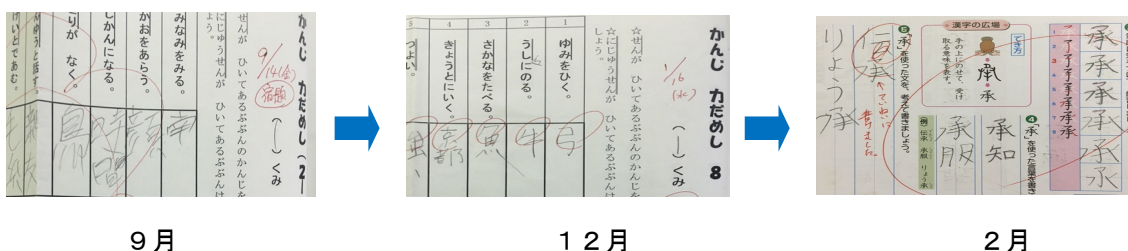
LD可能性の文字

検討してLDの診断が出るであろうという文字を選出し、選出さ
児童のベースラインとなる文字を決めだした。

タブレットを使って「筆順辞典」という書字ソフトを使って練
習したり、学習ノートやプリントを使ったりして学校での学習を
家庭でも繰り返し、月ごとにベースラインの文字と比較してよく
なったところを具体的に褒め価値づけと方向づけを丁寧に繰り返
していった。結果、ソフト・ハード両面による学校と家庭での連
携指導によって整っていった字形の変化を視覚的に示すことが出来た。下の文字が変容の様子（成果）であ
る。



タブレット学習



6. 定着・普及の方法

【6の1】 特別支援教育コーディネーターと教育相談担当合同研修会

2月の「特別支援教育コーディネーターと教育相談担当による
合同研修会」で名古屋女子大学宮脇修名誉教授から「LDの行動
特徴とその指導」＝感覚統合的アプローチと3者連携支援＝とい
う演題で、各小中学校の特別支援教育コーディネーターと教育相
談担当が講義を受けられるよう企画した。

特別支援教育や教育相談推進の責務を負う学校長は、各学校の
特別支援教育コーディネーターと教育相談担当を積極的に活用・
指導することになっており、本講座の受講はその具体となって市
内全校に本実践の意義や必要性が伝えられた。また、担当者に指
導が後回しになりがちなLD（書き困難）の指導法が伝わり、ど
の子も支援の対象であるという意識が根付いていった。



合同研修会

責務を負うのは学校長であるが、学校全体の動きを創っていくのは、特別支援教育コーディネーターであ
り教育相談担当である。その担当者がADHDやASD・不登校といった行動のわかりやすい児童生徒の支
援と同様にLD（書困難）についても教育的ニーズを明確にして支援していけるようになることが今後重要
となる。

【6の2】 幼稚園指導者対象の講演会

早期発見・早期対応が重要であることは、教育・医療のどちらでも言えることであり、有効な取り組みである。学習が始まるのは小学校からであるが、姿勢が崩れていたり、集中ができにくかったりする園児に小学校1年生に入学してから、定型発達の児童と同じように指導するよりも、幼稚園年少時代から感覚統合的アプローチの指導を年間通して園全体で取り組めるようにした方が効果的であると考えた。そのために幼稚園指導者を対象とした名古屋大学宮脇修名誉教授「感覚統合的アプローチとプログラム」という講座を企画した。

遊びを通し、身の回りの物を使って家庭と連携して指導する幼稚園で取り組める実践的な内容であった。また、理論的な内容は、感覚統合的アプローチのシリーズ講座5回を編集したDVDを参加者全員が視聴したうえでの受講であったため、実践と理論の両面から学べ「来年度、1年を通してカリキュラムに沿って園全体で指導したい」という声が多く挙がり、園長からも講座のまとめの挨拶の中で同様の内容が話された。



幼稚園指導者対象の講演会

7 研究の成果

成果としては、下記の3つがあげられる。

実践開始時に研究者や他校のアドバイスを受け、貴財団に改善計画を提出した中の成果目標が達成できたと言える。

- ① LD（書字困難）をつかむ客観検査と在籍学級での学習のエピソードを保護者の同意を得て医師につなぎ、診断を受けるシステムを構築できた。
- ② LD（書字困難）診断児への教育的ニーズを的確に捉えたソフト・ハード両面指導によって整っていった字形の変容（成果）を視覚的に示せた。
- ③ 幼保小指導者交流会を行うことにより、幼稚園と小学校を接続する内容が「姿勢・書き・集中」で行える見通しが立ち、感覚統合的アプローチの支援方法が有効であり、「姿勢と集中」が市内全園・全校で取り組んでいける幼保小の接続内容であることがわかった。

8 今後の展望

以下が展望され、波及効果としてインクルージョンの理念が見直され、ユニバーサル教育が多くの学校で展開されていくであろう。

- ① 幼稚園と小学校の接続関係を具体的に定める内容は、「姿勢と集中の指導」であることを決め出し、研究仮説を立てて1年間実践することで「体幹が保てない姿勢・書き困難・不注意で集中できない行動」

が改善し、正しい姿勢で集中し整った文字を書く姿が生まれることが
子どもの姿で実証できるであろう。来年度も実践研究を継続したい。

- ② 小1プロブレム対策として感覚統合的アプローチの基礎となる動きが通常学級に取り入れられ、朝の会や体育の準備運動等で行なわれたり、必要な児童は家庭でも繰り返したりすることで低学年学級全体の姿勢や集中して聴く姿勢がよくなり、学業指導が徹底して学習指導がスムーズにできるようになるであろう。